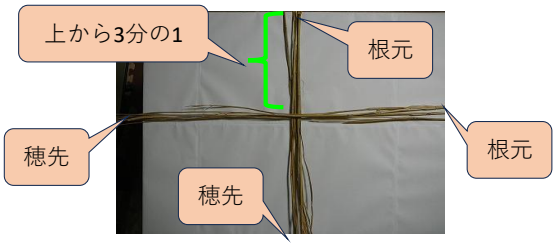
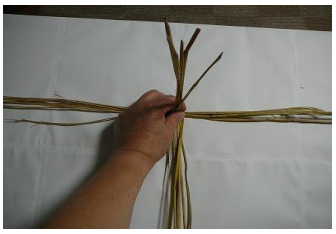
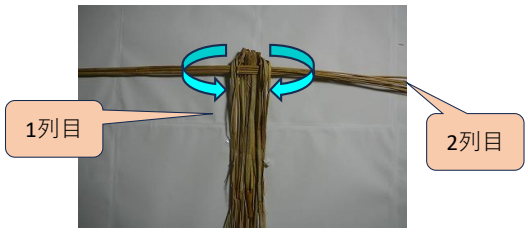
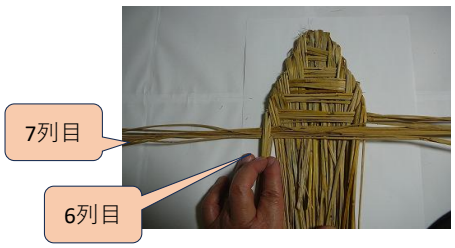
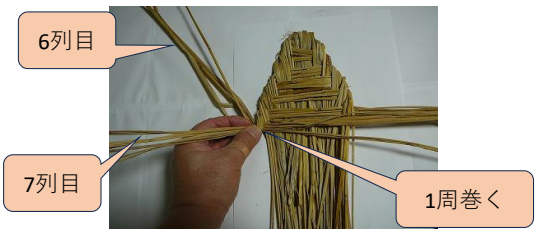
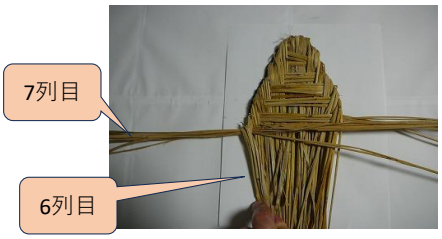
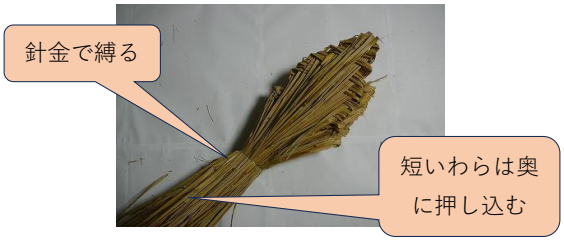
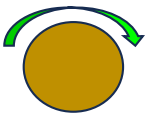
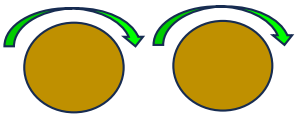
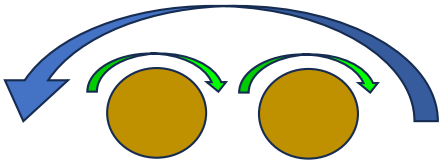
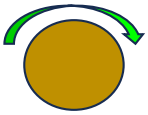
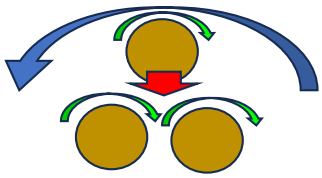
項番	手順	解説(補足)
1	わらへびの作り方 ＜ツジギリ＞ 八千代オイコス 2023年11月19日	＜材料＞ ①わら(もち米) 約200グラム ②針金(細) 50cm ③赤とうがらし 3個(目:2個、舌:1個) ④輪ゴム 2個
2	＜準備＞ (1)稲わらを霧吹きで湿らせる (2)稲わらを木槌で打つ →わらを柔らかくする (3)ハカマを取る	＜道具＞ ①木槌(づち)…わらを柔らかくする ②ペンチ ③ハサミ ④霧吹き…わらや手を湿らす ⑤木の板
3		(1)太めのわらを十字に置く (a)縦(たて)5本 かたい根元が上 (b)横(よこ)3本 根元が右 (2)縦向きのわらの上から3分の1の所に横向きのわらを置く
4		(1)縦向きのわらの上部を手前下側に折る
5		同上
6		(1)わらを3本取り横向きに2列目を重ねる (2)2列目の根元の向きは1列目の反対向き (a)横(よこ)3本 2列目は根元が左
7		(1)1列目のわらを下に折る (2)2列目の上からかぶせて手前に折る (3)列の間をつめて折る →出来上がりがきれいになる

項番	手順	解説(補足)
8		(1)わらを3本取り横向きに3列目を重ねる (2)3列目の根元の向きは2列目の反対向き
9		(1)2列目のわらを下に折る (2)3列目の上からかぶせて手前に折る (3)6列目まで上記、項番8～9を繰り返す (4)根元の向きは交互に反対向き
10		(1)へびの型紙に合わせて折ると良い ※「へびの型」は本資料の末尾参照
11		(1)わらを折る場所に爪を立てて折り目を付ける (2)折り目を付けてから折ると形が整う
12		(1)わらを3本取り横向きに7列目を重ねる
13		(1)6列目のわらは7列目のわらに1周巻き付けてから下に折る (2)ここが「口角」(口の両わき)になる
14		同上

項番	手順	解説(補足)
15		同上
16		同上
17		(1)7列目の横向きのわらを下に折る (2)へびの首の部分を輪ゴムで仮止めする (3)この面がへびの口の中
18		(1)裏返すとこの通り ※へびの頭側またはあごの下
19		(1)同じものをもう一つ作る →項番3～項番17をもう一度行う
20		(1)へびの胴体になるわらを2つのへびのあたまの間に置く
21		(1)胴体のわらをへびの頭に挟んで一つにする

項番	手順	解説(補足)
22		(1)2つのへびの首を針金でしばる (2)へび首根っこのギリギリをペンチで締める (3)針金の出ている部分はへびの首の中にペンチでわらの奥に埋め込む(ケガしない様に) (4)針金でしばった付近の短いわらはハサミやラジオペンチなどとがったものでわらの奥に押し込む
23		(1)首から下の胴体のわらを3つに分ける
24		(1)3つに分けたわらの1本目をねじる (2)ねじる方向は、しっぽから見て時計(右)回り  (3)首根っこを固定して首の方からぎゅっとねじる →やりずらい場合は2人協力してやろう
25		(1)3つに分けたわらの2本目をねじる (2)ねじる方向は、しっぽから見て時計(右)回り 
26		(1)ねじった2つのわら同士を巻く (2)巻く方向は、しっぽから見て反時計(左)回り 
27		(1)巻き終わったらほどけない様にしっぽの先を輪ゴムで仮止めする
28		(1)残りのわら3本目をねじる (2)ねじる方向は、しっぽから見て時計(右)回り 

項番	手順	解説(補足)
29		(1)ねじった3本目を1･2本目のねじった部分に巻く  (2)3本目は1･2本目のくぼみに沿わせて巻く (3)巻き終わったらしっぽの先をしばって取れないようにする
30		＜仕上げ＞ (1)板でわらへびを転がして柔らかくする (2)首からしっぽまで胴体部分の凸凹をならす (3)へびの頭は台に乗せずに転がす →頭がつぶれない様に
31		＜仕上げ＞ (1)飛び出ているわらをハサミで切り落とす (2)胴体を切らない様に注意する ＜オプション＞ (3)赤とうがらしを目(2つ)と舌(口の中に1つ)になる様に刺す

【道の駅やちよ】展示

【八千代市郷土博物館】展示

おまけ

わら細工 亀の作り方

八千代オイコス
2023年11月19日

＜材料＞
①わら 6本…三つ編みにする
②わら 20本(30cm×4本×10束)…井桁に組む
③ビニタイ×10本
④輪ゴム 4個
⑤タコ糸 30cm×18本

頭と甲羅の枠

わら6本の束の根元をタコ糸で縛ります

1

わらを2本づつに分けて長さ６０cmの三つ編みにします。幅が均等になるように編むときれいです

2

根元側２０cmと穂先側４０cmに切り分けて両端をタコ糸で結びます

3

根元側の三つ編みを半分に折り曲げ上向きの頭の形にします。先端から約５cmのところをタコ糸で縛ります

4

根元側の三つ編みの中心を首の上に乗せて✕の字に縛ります

5

甲羅と足

わら２本を根元から３０cmずつ２組切ります。根元側と穂先側を互い違いにして片端をビニタイで縛ります。これを１０束つくります

6

まず６束を井の字に互い違いに組みます

7

さらに４束を外側に互い違いに加えます。上下左右の束の出が均等になるようにします。井桁の隙間がなくなるように束を詰めます

8

四方に出た束それぞれのビニタイを外して輪ゴムで縛り直して一つにします。

9

甲羅の真ん中を盛り上げて形を整えます

10

組み立て

甲羅の枠を後足の一つの束の下を通してお尻のところで両端をタコ糸で縛ります

11

各足を２か所づつタコ糸で縛ります。前足と後足をバランスを見ながら足の外側が長くなるように斜めに切ります

12

３項で余った穂先の束をお尻から差し込み首の端をタコ糸で縛ります

13

甲羅の枠を楕円形に全体の形を整えて出来上がりです

14

豆知識
民俗ーNo.8

年中行事(4)

鬼を止める ツジギリ

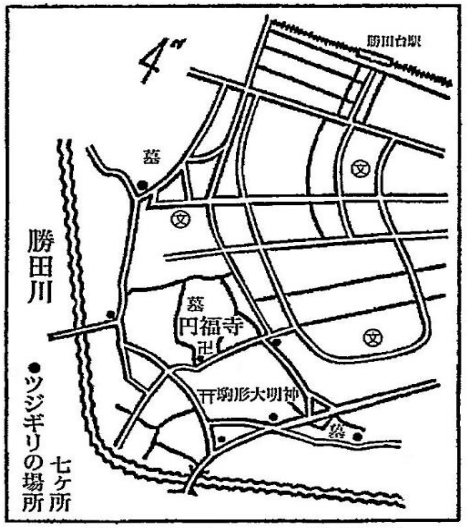
八千代市立
郷土博物館
047(484)9011

私たちが住む地域(ムラ)において、外から入るムラ境の道端の木に藁の蛇が掛けられたり、注連縄が張られている光景を見ることがあります。これは、辻切り・道切り・綱吊りといわれ、外から様々な疫病や災厄(総称して鬼と呼ぶ)が入り込むことを防ぎ、平和で穏やかな生活を守るために、年の始めに新しいものを作り掛け替えています。千葉県内でも比較的多く見かけられる習俗です。

市内で今も続けられている地域は、上高野・下高野・下市場・勝田・村上下町・村上台町・高津の７ヵ所です。

ツジギリのタイプには蛇型と注連縄型があり、上高野・下高野・下市場は蛇型で、その他は注連縄型です。高津も現在では注連縄型ですが、昔は蛇型であったといいます。その証拠に今も半紙を丸めて墨で二重の輪を書き藁に指します。これは蛇の目玉だそうです。

このツジギリには鬼を払う方法として２つあります。一つは蛇型の場合は蛇のように怖い動物が外へ向かって大きな口を開き、いかにも飛びかかってくるかのように威嚇し鬼の侵入を未然に防ごうとするものです。注連縄型の場合は、元々道に張り鬼の侵入を遮断するのですが、現在の交通事情では通行の邪魔になるため、まるめて木に掛けられています。もう一つは柊・ヤツデ・杉の葉・唐辛子・大蒜・採香など刺々しい葉や香辛の強いものを嫌う鬼をムラへ近づけさせないようにします。また、神仏のお札の御利益にもすがっています。一般的には神社のお札で塞神(境の神)で「八衢比古神・八衢比女神・久那戸神」の三柱の神が書かれています。これらの神は延喜式にある「道饗祭」で、京都の西隅に祀られるとされる神です。この祭は、外から来る魑魅・妖怪の類を都の入口で迎えて饗応し、中に入れることなく、そのまま送り返すという祭です。平成21年まで行われていた小池のお札は板片に「南妙法蓮華経・鬼子母神・十羅刹女」など仏教による経文が書かれており、仏の力にすがって鬼の侵入を防ごうとしたことが窺えます。

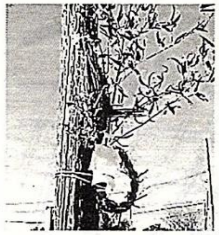


勝田の場合のツジギリ箇所

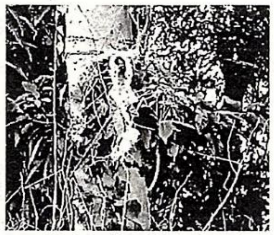
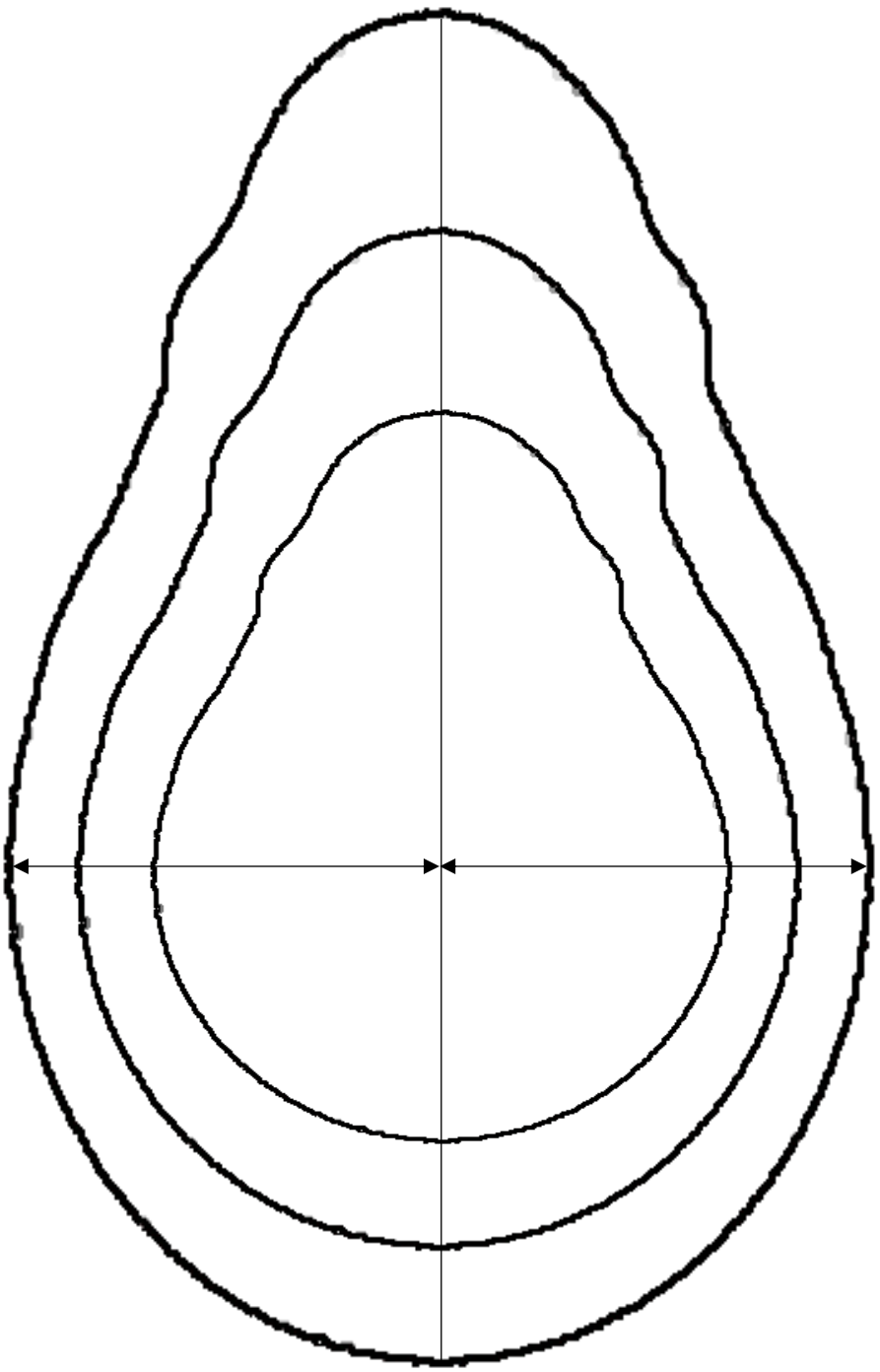
これらのツジギリでも鬼の威力が強く突破された場合は各家が襲われます。そこで各家でもツジギリと同じ小型のものを作り、侵入に備える地域もあります。

人々はこれ以外にも荷重にもなる防御を考えました。ツジギリの後では、２月の節分に各家では豆を撒いて鬼を追い払ったり、目籠と草履を餌にして鬼を捕えようとして軒下に掛けたりします。その後、６月になると人形送りが行われました(現在では行われなくなった)。これはムラ内に侵入してしまった鬼(災厄)をワラ人形でムラの外へ追い出す行事です。また各家においては、正五九(正月・５月・９月)の前月末にはミソカバライを行い、幣束で家中を祓います。その幣束に付いた災厄を家の外まで払い出し、幣束を屋敷境の地面に差して放置します。

このように、ムラとそこに住む人々が最良の状態で生活できるようにえたものが、年中行事として今も残っています。



蛇型(左：村上、右：上高野)


注連縄型(高津)

≪参考文献≫
・『勝田の民俗』都留文科大学民俗学研究会編　1983年
・『学習院民俗№3 上高野の民俗』学習院大学民俗研究会編　1985年
・『八千代市の歴史　資料編・民俗』八千代市史編さん委員会編　1993年